

わたしに問わなかった者たちに、わたしは尋ねられ わたしを捜さなかった者たちに、見つけられた

第185号

イザヤ 65:1

平成23年2月25日

エジプトに対する宣告。見よ。主は速い雲に乗って、エジプトに来る。エジプトの偽りの神々はその前にわななき、エジプト人の心も真底からしなえる。わたしはエジプト人を駆り立ててエジプト人にはむかわせる。兄弟は兄弟と、友人は友人と、町は町と、王国は王国と、相逆らって争う。エジプトの霊はその中で衰える。わたしがその計画をかき乱す。彼らは偽りの神々や死霊、霊媒や口寄せに伺いを立てる。わたしはエジプト人をきびしい主人の手に引き渡す。力ある王が彼らを治める。一万軍の主、主の御告げ— ……その日、エジプト人は、女ようになり、万軍の主が自分たちに向かって振り上げる御手を見て、恐れおののく。ユダの地はエジプトにとっては恐れとなる。これを思い出す者はみな、万軍の主がエジプトに対して計るはかりごとのためにおののく。その日、エジプトの国には、カナン語を話し、万軍の主に誓いを立てる五つの町が起り、その一つは、イル・ハヘレスと言われる……彼らが生きたげられて主に叫ぶとき、主は、彼らのために戦って彼らを救い出す救い主を送られる。そのようにして主はエジプト人にご自分を示し、その日、エジプト人は、主を知り、いけにえとささげ物をもって仕え、主に誓願を立ててこれを果たす。主はエジプト人を打ち、打って彼らをいやされる。彼らが主に立ち返れば、彼らの願いを聞き入れ、彼らをいやされる……「わたしの民エジプト、わたしの手で作ったアッシリヤ。わたしのものである民イスラエルに祝福があるように。」 イザヤ書 19 章

人の子よ。預言して言え。神である主はこう仰せられる。泣きわめけ。ああ。その日よ。その日は近い。主の日は近い。その日は曇った日。諸国の民の終わりの時だ。剣がエジプトに下り、刺し殺される者がエジプトで倒れ、その富は奪われ、その基がくつがえされるとき、クシュには苦痛が起きる。クシュ、プテ、ルデ、アラビヤ全体、クブ、彼らの同盟国の人々も、彼らとともに剣に倒れる。

主はこう仰せられる。エジプトをささえる者は倒れ、その力強い誇りは見下げられ、ミグドルからセベネに至るまでみな剣に倒れる。一神である主の御告げ— エジプトは荒れ果てた国々の間で荒れ果て、その町々も、廃墟となった町々の間にあって荒れ果てる。わたしがエジプトに火をつけ、これを助ける者たちがみな滅ぼされるとき、彼らは、わたしが主であることを知ろう。エゼキエル書 30 : 1 – 8

今年年頭から二月にかけてチュニジアとエジプトの独裁政権が打倒され、指導者が国外に亡命する革命が起きたことに端を発し、北アフリカから中東のアラブ諸国でデモ隊と国家権威当局との紛争が勃発、次々に隣国へ飛び火し、十六ヶ国を巻き込む事態に進展しています。クーデターを起こして元首となり、四十六年間強硬政権を貫いてきたガダフィ大佐のリビアでは、反政府デモを暴力行為で阻止する政策をとったことで自ら率いる共和政権自体の分裂を引き起こし、市民戦争に発展、エジプトの次期大統領候補と言われていたムバラク大統領の次男が英国に亡命し、チュニジアの大統領がサウジアラビアに亡命したように、ガダフィ大佐自身、亡命の身となるのも時間の問題と憶測されています。興味深いことに、イスラエルの‘チャンネル2ニュース’はガダフィ大佐のまたいとこで、リビア出身のイスラエル人の二人の女性にインタビューし、ガダフィ大佐の母方の祖母がユダヤ人であることから、民族的にはガダフィ大佐はユダヤ人で、万が一、大佐の亡命の受け入れ先がない場合でも、イスラエルの掟により、大佐は無条件でイスラエルに移住することができることを報道しました。

聖書には、エジプトに関するまだ成就していない多くの預言が記されています。冒頭に引用したイザヤ書 19 章はまさに現在起こっていることを描いており、エジプトを中心に近隣のアラブ諸国を巻き込んでいる今日の混乱状態が究極的にはどのような状態へと導かれるかを預言しています。人を創造され、種族、部族、氏族に分け、それぞれに住むべき地の境界を定められた神の御目的は究極的には、全人類が神の家族の一員として父の御国で永遠に生きることですから、神は、人が肉の身体で歩むこの世の人生の間に、一人ひとりが自分中心の生き方から神に立ち返ることができるように道を開き、繰り返し繰り返しチャンスを与えてくださっています。この神の人類救済の御目的が、イザヤ書のこの箇所、神の民イスラエルの生涯の敵エジプトやアッシリヤもついには神の民となるという預言的眺望で締めくくられているのです。「主はエジプト人を打ち、打って彼らをいやされる」は神の救いの手段で、ご自分の民イスラエルと同様、すべての民は神の家族の一員となるために、試練を通して練られ、学び、唯一真の神を認識し、御国に入るに相応しい者として聖められるのです。

今年は二月半ば過ぎの時点ですでに世界中の二十四ヶ国、一アルバニア、アルジェリア、アルゼンチン、オーストラリア、バングラデシュ、ベルギー、カナダ、チリ、キューバ、キプロス、エジプト、ギリシャ、ホンジ

ユラス、インド、アイルランド、イスラエル、イタリア、ヨルダン、チュニジア、トルコ、英国、米国、ベネズエラ、イエメンで、権威当局に対する大々的な民衆のデモ行進、抗議行動が持ち上がったようですが、特に、中東、北アフリカで勃発した反政府行動、民族解放革命は多くの死傷者を出し、独裁者打倒後の暫定政権にも民衆の不満は募っており、混乱は治まるどころか情勢は深刻化しています。預言者エゼキエルは、真の神ヤーウエと神の民イスラエルを認めず、反逆する諸国民の上に裁きが下る日を「**主の日……その日は曇った日。諸国の民の終わりの時だ**」と呼び、エジプトだけでなく、「**クシュ、プテ、ルデ、アラビヤ全体、クブ、彼らの同盟国の人々も、彼らとともに剣に倒れる**」ことを預言しています。今日の、エチオピア、リビア、北アフリカ、アラブ人諸国がエジプトとともに倒れる国として挙げられています。ちょうど現在、反政府運動が起こっている国々に一致するのです。北アフリカから中東にかけて、東からモロッコ、アルジェリア、チュニジア、リビア、エジプト、スーダン、レバノン、シリア、ヨルダン、サウジアラビア、イエメン、シブチ、イラク、イラン、バーレーン、アラブ首長国連邦が、現在、国情が不安定になっている十六ヶ国で、ガザ地区とヨルダン川西岸地区を含めると十八ヶ所が不穏な情勢下におかれています。これら十六ヶ国のアラブ諸国はすべてイスラム国家で、イスラエルはまさに「**さあ、彼らの国を消し去ってイスラエルの名がもはや覚えられないようにしましょう**」(詩篇 83:4) とイスラエル国家(ユダヤ人)撲滅の機をうかがっている近隣諸国に取り囲まれているのです。今日世界中のユダヤ人人口は千三百五十万人で、その80%がイスラエルと米国在住で、イスラエルには五百七十万人のユダヤ人が住んでいるとのこと。しかし、イスラエル国家の半分以上はアラブ人など異邦人で占められているので、ユダヤ人は自国にあっても過半数を占めておらず、イスラエルとの平和協定を結んでい唯一のアラブ国家エジプトのムバラク政権が打倒された今、文字通り孤立化した状態におかれたのです。

エゼキエル書は 29～32 章にかけてエジプトについての預言を告げていますが、「**エジプトの住民はみな、わたしが主であることを知ろう。彼らがイスラエルの家に対して、葦の杖にすぎなかったからだ。彼らがあなたの手をつかむと、あなたは折れ、彼らのすべての肩を砕いた。彼らがあなたに寄りかかると、あなたは折れ、彼らのすべての腰を痛めた。それゆえ、神である主はこう仰せられる。わたしは剣を送ってあなたを攻め、人も獣も、あなたのうちから断ち滅ぼす**」(29:6-8) と、エジプトのイスラエルに対する姿勢に応じて神がエジプトを裁かれることが明らかにされています。この預言は、過去のイスラエルとエジプト、あるいは諸外国との間で、神のご介入として起こってきたことでしたが、同じ原則は現在も適用することができます。1979年に結ばれた平和協定以来、イスラエルと友好関係を保ってきた、あるいは、少なくとも中東和平に貢献してきたエジプトが現在の暫定政権を経てイスラム原理主義者による政権に移されることになれば、明らかにイスラエルに敵対することになり、このことは神の怒りを買ひ、エジプトに神の裁きが下ることになるのです。続く 8-12 節の文脈は核によるエジプトの破壊が暗示されており、ナイル川下流の三角州からエチオピアとの国境のアスワンに至るまで、すなわちエジプトの北から南まで全土が荒れすたれ、ナイル川の水は汚染され、明記されている「**四十年**」を逐語的に解釈しないとしても、とにかく一定期間、動物も寄りつかなくなるのです。しかしこの文脈でも、冒頭に挙げた 30 章と同じように、神の御旨はエジプトを完全に滅ぼすことではなく、エジプトの民が、ヤーウエこそエジプトに生命の源ナイル川を与えてくださった神であることを認識することにあることを明らかにしています(詳細は『[一人で学べるエゼキエル書](#)』—エジプトに対する預言—、参照)。

エジプトのムバラク政権打倒でイスラエルの南の国境の安全性が保証されなくなった今、戦闘の絶えないガザ地区と西岸地区を内部に、東はヨルダン、西はレバノン、北はイランに取り囲まれ、イスラエルの治安は急速に脅かされています。エジプトに引き続いて、イスラエルを取り囲むイスラム教圏にも神の裁きが下るというエゼキエルの預言の成就のときがにわかに近づいたことは、現在の中東情勢から明らかです。イスラエルの南の国境からの侵略の可能性、すなわち、1973年の“ヨム・キプル”戦争以来の砂漠戦争がアラブ諸国との間にいつでも起こりうる状態になったこと、エジプトとの平和協定で1979年のイスラム革命以来三十年以上禁止されていたスエズ運河の軍艦航行をエジプトの暫定政権が許可し、イランの軍艦二艘がレバノンに兵器を運ぶために通過したことなど、イスラエルを脅かす近隣諸国の行動が目立ってきているからです。また、イランのアフマディネジャド大統領は就任以来、イスラエル撲滅の爆発宣言で知られていますが、背後に何か秘密があるのではないかと疑われるほど公言を繰り返し、反イスラエル感情を激化しています。今年一月に、イランの中心都市ハマダンにあるユダヤ人モルデカイとエステル(五世紀 BCE にペルシャ王アハシュエロスの妃となったエステルと王に次ぐ地位に就き、ペルシャ王国の平和に貢献したモルデカイ、ユダヤ人を撲滅の陰謀から救ったユダヤ人の英雄)から歴史的記念碑、公式巡礼地としての標識が取り除かれ格下げされただけでなく、武装隊に取り囲ませ破壊しかねない攻撃的な態度を取るなど、イランの態度はエスカレートしています。これはイスラエルがエルサレムのアルアクサ・モスクの地下を発掘したと言いがかりをつけての報復の脅威ですが、イランのニュースでは、エステル記 9:16 の記述、—アダルの月の十三日、ユダヤ人が団結して敵を虐殺したこと—が取り上げられ、二千五百年前に生きたモルデカイとエステルに、七万五千人のイラン人を殺害した責任がなすりつけられたのでした。